

長崎夜話草
一

2189

長崎夜話序



天地のわたり物にけりまゝなりんや人の
あつらんをりたれうてあやしくはるゝわると
とてかゝるをみえんはるゝはるゝ知るはるゝ
豊蘆原へはるゝあふて天竺震旦もた虚中
の一粟蝸牛角上は何事ををわゝるゝはるゝ
わゝるゝのうけりきて又いつまでもはるゝわゝるゝ
身を捨てぬ忘るゝ神と聖との清くわゝるゝ
わゝるゝうゝわゝるゝわゝるゝ身をわゝるゝわゝるゝ

○長崎夜話序

おとそはるゝわゝるゝはるゝはるゝはるゝはるゝ
をりたれうてあやしくはるゝわると
とてかゝるをみえんはるゝはるゝ知るはるゝ
豊蘆原へはるゝあふて天竺震旦もた虚中
の一粟蝸牛角上は何事ををわゝるゝはるゝ
わゝるゝのうけりきて又いつまでもはるゝわゝるゝ
身を捨てぬ忘るゝ神と聖との清くわゝるゝ
わゝるゝうゝわゝるゝわゝるゝ身をわゝるゝわゝるゝ

己亥冬呂

崎江釣淵子書於求林齋

長崎夜話目録

一之卷

- 一 長崎由来 并 鎮壇石之事
- 一 黒船入津之始之事
- 一 初上船之事 付 後寛政下之事
- 一 那麻權現 并 日清崎親善之事
- 一 有馬氏黒船焼討之事
- 一 邪宗門制禁 并 黒船停止之事

○長崎夜話目録

○二

- 一 紅毛船初來之事
 - 一 異國渡海禁止之事
 - 一 蠻人子孫遠流之事
 - 一 紅毛人子孫遠流之事 付 じやかたふ文
- 二之卷

- 一 蠻船一艘入津討伐之事
- 一 蠻船二艘來朝之事
- 一 亞媽港ヨリ日本人送來船之事

一 王ケレス船日本に來ル姑之事

一 唐船長崎津小島に姑之事

一 世嘉萬國金銀之沙汰付 紅毛金幣小到事

一 金華山之事 并 紅海之事

一 紅毛船破損之事

一 暹羅金れ船之事 并 暹羅國之沙汰付

一 祇園精舍の跡見々々人之事

一 暹羅ヨリ千部經志願之事付 紅毛船中沙汰

○長崎夜話目錄

三之卷

一 塔伽沙谷之事付 溪田兄弟之事付 國

姓爺物語

一 紅毛船普陀之亂事 并 紅毛船長

崎焼失之事

一 巴旦人日向に漂着之事

一 異國船漂着多事付 薩摩夜久崎異

人之事

一 蠻人紀別江漂流之事并呂宋國之沙特
一 日本船異國漂流近代多事

四之卷

- 一 孝子六人
- 一 忠夫一人
- 一 貞婦一人
- 一 清民一人
- 一 直民三人

○長崎夜話目錄

四

- 一 義夫二人
- 一 烈女一人

五之卷

- 一 長崎土產 三十九種

長崎夜話

長崎
西川正休編輯

○長崎由来并鎮懐石之東

天いさきへ地をさふあひありて因縁の理り
又於へるべし神功皇后異國征伐乃由時
胎肉の皇子誕生とありて靈石とありて
多津瀧乃上りてさうとありてゆねは
石へ流るる若かりて彼岸の都平敷とありて
より得させ給ひしなりとありてはりり
今我前怡土郡深江村八幡宮乃より神體と

○長崎夜話一

法壇石是ちりりぞ萬葉集建部牛磨り歌よ
 天地の昔よりくついはぎといふにんはさる
 一々にとやまはにけ石ちりりあへりり石
 とぬくと成るふよりんよりぬとるの平敷と
 一いつりこよと餘多年幾そぐれんよまひ
 一むとちり人なり然るふ一とせ或人のつり長
 崎市所をよる幸一里なる北乃と里に平
 宿といふ所あり其の村ちり東のより燧石赤
 白ちり多く出村人多く賣ちり狐玉人撰しそ
 緒留のむれよりりり唐土の雲南石は異なり

とて人々價高く買ひぬ則は石なりとてみそやう
小實は英^{えい}ききといふはこゝろはうの平敷
やうな平宿の事なりわとも敷と宿とゆひ
いふやうな平れ宿と訛^{あやま}るはこゝろはうと
鎮壇石のありゆきに石と深江村長崎の古名
と深江村といふこととてわやうな又長崎の
津とて五^ごの浦といふことと福富の津といふ
ことと又湊口の西東のうへ女神男神の名あり
湊の内は鎮^{ちん}のあり津の内に高^{かう}鉾^ぼ神のあり
かゝるは白皇^{しろこう}后^{こう}の能^{あた}るは竹葉^{しやくえつ}酒^{しゆ}の

○長崎夜話一

○二

こゝろはうの世は誰人の何なりとて
けり汲^ひりきん玉^{たま}れ浦の名はよけで満^{まん}津^{しん}の津
沖^{おき}のあり神^{かみ}ハ本^{もと}と今^{いま}の香^{かう}焼^{やう}とてえと弘^{こう}は大師
乃^な入^{いり}唐^{たう}の護^こ摩^ま焼^{やう}といふ事なり心^{こころ}のあり
をわたりね浦^{うら}被^ひけりをえあうの堺^{さかい}なりとて
代^{しろ}り異^い國^{こく}のあり津と定^{さだ}めてはしと又^{また}おと
いふはこゝろはうのあり唐^{たう}土^どのあり我^{われ}輩^{はい}夷^い
狄^{てい}の果^はとて長崎の名なりとて年々入^{いり}来る
かゝるは多^{おほ}うといふは久^く崎^きの領^{りやう}なり
を豊^{とよ}臣^{しん}閑^{かん}白^{はく}の時^{とき}公^{こう}領^{りやう}とて長崎と里^{さと}間^{かん}

二三艘教子賣月の商物とて積ありぬ是より
年々不絶と云七艘又十艘ある年あり
けぬ潮く人の住家も教をい所と多く成
る今の業と云ありなり生主神の諏方大
明神とて住吉熊野三所清一社と祀り
諏訪の清神の軍神とて住吉の船靈の清神
熊野の本徳の清神とて東南に遷り
是も降伏の神とてやうと云ふ事と思
はれり此れせうと社を崇められなり
其始り云々人なり神功皇后異國征伐の事

○長崎夜話一

○四

護神とて祀ひありやうと云ふ事
多し今社の教は四所支部の神社五所
都て大小四十寺に繁榮あり

○後寛延之事 付 後寛延死す之事

長崎の津より南五里の海路にありて
東海と云ふくわたりて清くあり民家も多
く漁者衆ま集り一説は後寛延師の配流
ありといふ事あり異本の平家物語は彼
邦のいふ事ありと云ふ事ありやう
其異本云々これいふ事ありと云ふ事あり

のありては薩摩の仲の小事とすみされどいづ
 にはわづらひしされど彼杵那の平氏門族の領
 けは計は資盛卿の領多しとては後定と痛
 りつひとては功れて遠く薩摩の仲より
 中々に親しい國をさす事ありとては薩摩海
 岸よりけしきとて迫りゆては薩摩の
 泉陽ありとて硫黄石ありとてさう
 いふとては薩摩の事ありとては薩摩の
 とは薩摩の東深掘といふ地は有王塚とて塚と
 とては薩摩の事ありとては薩摩の境は麻背
 とては薩摩の事ありとては薩摩の事あり

○五

○野^の府^ま指^{びん}現^{えん}并^び日^い沙^の吟^{ごん}觀^{くわん}音^{おん}之^の年^{ねん}

又薩^{さつ}戸^この^の所^{ところ}ありて^{まゐ}る^る親^{おや}音^{おと}の^の是^{こゝ}地^ちあり^{あり}福^{ふく}建^{けん}
乃^なも^も海^{かい}より^{より}南^{みなみ}回^{かい}と^とり^り西^{せい}あり^{あり}正^{ただ}浦^{うら}乃^なは^は伊^い呂^ろ波^は氏^しの^の

娘せれて靈異あり十餘歳にて我に則海神に化身
なり海洋に入りて往來の舟を守護せしと忽
海水に没死と則南田小廟社を建て船神と崇め
奉りて今にあり又明の壬子より天姥老媽の謚号
を賜り觀音の化身なりて唐土の諸船甚多
と其海中に没せし者骸の流れて唐土の海に
寄つてあるとあると云ふ事ありぬるのち程々
靈異の事ありて往來の船に災とけり長崎入
津の唐船も洋中より初くいふ狐なる何法儀を
焼金銀を以て拜崇り是よりいふを野間山

○長崎夜話一

○六

権現と号する野間の和訓に則老媽の唐韻の
轉語なり又長崎津外七里あり老媽と云ふ
浦ありるこの麓に草堂に寺あり云ふ一
體長七尺許り此基菩薩の作と云ふ書
よふ此日清崎の觀音これあり則けい高し下
を日清崎といふ唐船に入りて遙々と野
間と老媽と通韻とを殊にいづる觀世音
の聖地なりなり皆老媽の神韻ありけり
野間野底のありとも唐人の文堂といふ
ありけりより傍りき事共なりてけり

「未の世に窮められ来る共々ならはいや
まぐろーき事なり」

○有馬氏黒船焼討之事

慶長十四己酉の年八月西郷港より入津を
し黒船一艘有馬の城を焼討せし積
其意趣は有馬修理のたまふとや交趾國より
檳榔よりとて船けりしとふは船之洋を
走れどもあまうの地へ漂ひてぬ船のそこ
にけりしとふ日船はけりしとふ其船人を
蠻人と喧嘩し傷く蠻人味方多勢とて日

本の船人みし人悉く殺して財寶らるる
奪いとりぬ日本よりなりし事た志しぬとて
何と云ふといふとぬ船風とて行来とて成ふ
しとて有馬は在し妻や子の物もむつ嘆
いといふなりしとあるふ八月入津のころ船
これの喧嘩の者もは船に乗来たりや他
の船は蠻人長崎へは物倍と有馬は
しとて幸の事と悦びとて関東へ討つ公の
許を得多しとて焼討せんと謀ふとて
し船人の内より衆をたれり有るは船の

加毘豆瓜^{いん}とて推問^{おひ}方^{かた}へそのきなりを
いふても秋^{あき}空^{そら}をいつと我身^{われみ}れ大事^{だいじ}とお
もい塞^{ふさ}ふ花^{はな}は終^{はつ}と纜^{りょう}と解^とておろ霜^{しも}月の
幸^{さい}されば順^{じゆん}風^{ふう}み帆^ふを揚^あぎと出^でる有^あ馬^ば
の人のねとつと重^{おも}く用意^{ようい}の長^{なが}船^{ふね}并^{なら}燈^{あかり}草^{くさ}
船^{ふね}板^{いた}十^{じゆ}艘^{さう}追^おつとくは蠻^{ばん}船^{せん}大^{だい}鏡^{きやう}を船^{ふね}に
と追^おつと船^{ふね}はなわたりとく沖^{おほ}の海^{うみ}に巖^{いわ}
中^{なかつ}に崩^{くづ}れて船^{ふね}を船^{ふね}の東^{ひがし}に到^{いた}る
是^{こゝ}も五^ご里^りの海^{うみ}路^ぢされば追^おつと船^{ふね}と追^おつ
つとくともやは船^{ふね}を船^{ふね}の西^{にし}に海^{うみ}に幸^{さい}出^でる

○長崎夜話二

舟にふりかへて舟の跡をたゞ追ひの舟の中より
 付^つかへて舟よりありとあらうを告ぐらうなり
 ら蠻人の運や移りてん何なる小舟の吹やそ
 れをふれぬ風とらじこそそふ思ひされまう我に
 是れなりんまふてあてそ後^{サキ}負^{オカ}決^{ケツ}きんや
 我いきん碇^{イカリ}をいそ追ひの舟の追ひぬる相
 待^{マテ}るわうふ舟馬の伝^{ツタ}へ追到^{ツキ}つめれと妄^{カウ}
 う押^{オシ}やえお味^{アジ}方^{カタ}人^{ヒト}をそふらん事^{コト}然^{シカ}慮^{リョ}
 る静^{シズカ}は下^{シタ}知^チて煙^{エン}るをそふれ方^{カタ}みれ
 ぬい一^{ヒト}大^{ダイ}筒^{ツツ}小^コ筒^{ツツ}ふれぬ一^{ヒト}方^{カタ}より打^ウてを續^{ツグ}ぬよ

つは之銃を打つ防と蠻人の白魚の把事
看やてもふく日本の夫をぞ防ぎたる然れ
ども風上から煙草を流さるるを燃付れども
變えどもいふに防つてやつるやえつるや又
乃桶もふ火火へく火焰須臾より桑興一
和も花物もく人わがり蠻人二百餘人一時
先きし罪業の報いの程をて懸つた白魚二
十餘萬斤白銀二千餘貫目金子の鑢腕
金の若令布帛の織物金襴綾羅錦繡海
上よりこれ浮く青黄紅白の波浪ゆかり

○長崎夜話一

つてありて後補代りさるるをれく一時れ
そ成りたる時十一月九日の事と云ふは
一説に慶長二年の事なりといふ有馬氏
の叔父と云ふれ年なりといふありて

○邪宗门制禁并黒船停止之事

黒船年毎にありしつとく耶蘇の外は漸く
いふより天草より來れ農民邪宗に改め
の苛政を憤り徒黨を爲しある馬原の戦乃
廢跡と云ふて男女二萬人楯籠りて討定
十四丁丑の年十二月に則關東の佛下

板倉氏清下向して且其外九別の徒共名數萬の
軍士寡くありしう大城強くして數月相とらぬ
板倉氏戦死ありて板平伊豆の老守清下向して
翌年寅の二月落城しぬ大將大に四弟あまの長崎
所せれどもかれい懲りて首級長崎大波立して一
七月獄門よりき執龜城の要徒二万人れ着て皆
一同西坂とて下りて埋みたり今の有馬塚是也
うは丸逞のおろし南蠻の外はより物とられ
く公事の汚惡と深く候へ終は黒船清制禁と
して其年秋上使大田氏下向ありてまゝて日本

○長崎夜話一

○十

小島よりいふと堅く作ありて歸されぬまゝと黒
船日本後海のより絶えりいふれより邪宗の教へ
をば公事よりせられさせ多しといふ一統は
乃いよりいふは附よりこそ根といふる要松枯
りし事とありぬ唐土より嘉靖萬曆の比南蠻
邪教の後ありて愚民をとりひいていふと儒佛の
教はの外は何う教へさせられんやとて信して
よその事りしが今もいふよりつゝは制禁をかき
きて水主の人氣を惡む事ありやをのつゝ
あつゝいふ者ありとていふる唐土に唐人中

い下無筆文育の老案一日平八雲平文育多
うい人や百年おれ世の民をやう番事れ何
多く世の風俗神儒の学の貴れ事成るうう
ちく文育からい希るうせうなりね案れあわや
○紅毛船来事

黒船禁止うし津の民世海りうと生計を
を恤うれむい多年平戸へあり阿蒙院あもんの高船と
長崎の津に到いたりしう有公事の作ありて寛
永十八年乙酉うし津へ入るなり事やなりぬ
平戸へ紅毛船の来り始り慶長二丁酉の乙丑

○長崎夜話一

○十一

月と今乙酉年四月乙丑の夜なりしよりうし
後海年うし船来事なりし紅毛國の唐土天竺
より西北の方ふわりて海上一萬餘里の國なり
年うし船来容易うなりて答伽沙吉やう
わは船よりあり長く思より日本へ後海へ来
國の主人の常ある國に存り他國へある
寛文元年國封爺よりうし船来事なりし紅毛人
追を終り一船を神領一國名瓜東寧と改
ひ是より紅毛の居留地より落り琉球國の
地よりわくく保國にて居候と

○異國後海禁止之事

黑船傳ひの希より耶蘇の教へはけりあつて事を公に
のりつづるに日奉れ人々の異國へ後海のいり
なり笑ひやとて寛永十二の年日奉異國後海の
船傳ひせむとせしめ是より長崎より所先許に御朱
印給ひて年々異國へ後海せし船より留め長崎より
後海の船五艘い末次氏二舟中氏一荒木氏一系尾氏一
より泉州堺伊豫屋船一艘京都船二艘へ東京角
倉伏見屋より二所の船合て九艘の外他あり
後海をいふこと皆長崎より唐船造られ大船

○長崎夜話一

○十二

了作とて皆長崎の津より出帆とは何れ人耶まは
付事より東京更遊塔仙沙古呂宋亞媽港東埔寨
暹羅亦の外國へ付来せし唐土には倭寇とて明朝
の和より日本れ船と甚禁制せしゆと之に義隆より
勸合船の外より唐土海色の渡り日本の船到り
本國に制禁せし付より船よりはぬと皆外國へ付来
て一此世に唐船のやより長崎より後海せし人通
はしとて存命ありと多うなり

○蠻人の子孫遠流事

寛永十と丙子ね年よりやと蠻人の子孫長崎

よまゝと公をより吟味わけて二百八十七人阿媽
港に遠流せしは血脈^{ちゆうま}又を奪ぎて母はいかゞい
かしく人の母日本の種子なり又蠻人の血脈
か秋^{あき}ばかりなり又日本はく母蠻人の血脈な
るは則母のまはうけて子にまじりて又放され
多子にあり或は子放されて母とまじり母放さ
れて子にあり兄けて兄弟あり兄弟けて兄弟あり
又妻おちて姉妹お離れありさぬ所く戸
々の悲しきありしころをたわし夷の袖を
らぬにありしころをたわし姫路のちをたわし
○長崎夜話一
○十三

入寛永十六年己卯の事なりや紅毛國と蠻國と
新いといふ水土なりこの種子日本乃種子も混
雜と云ふといふと則ち戸長崎に在り紅毛血脈乃
どもかゝ十二人喚^{おや}嚙^{くは}吧^ばへ^い流^{りゅう}と云は時より云
り云々といふ紅毛人位居りて平戸へも毎母船
けりいふいふゆへに紅毛の子孫のみを喚^{おや}嚙^{くは}吧^ばへ^い流^{りゅう}
かりけり十二人皆長崎より帰帆の紅毛船より
来て放^{はな}けりけりいふいふ是ハ蠻人乃種子といふ遠い
紅毛船ハ日本へ停止しと云ふねいふ毎日本は
おも船入ハ唐船も往來ありゆへに故郷の親と云

○長崎夜話一

○十四

親あるといふところなるへ文^ふけりいふところ物あるを
くありし其の中ハ長崎何處の町ハ女人といふ紅毛人
とて母方乃よりいふあるが如く書^かけられ居りといふ
は十四日方ハ紅毛喚^{おや}嚙^{くは}吧^ばへ^い流^{りゅう}と云ふは女教と云
いふところなりといふも常ハ草紙なりと云ふいふ
いふところなりといふ人なりといふが如くあり親され
何のゆへなりとされ親とて咽^なれ故郷へ歸^{かへ}ん
事ハ紙神も佛も親もいふは月と云ふはしうかく
ふいふありと云ふねいふと云ふがまけといふ令^し乃
病^{やま}のよるものなりと云ふこと一人の妻とありて

がわりの海に國は唐土人より多く住居しあ
ふにきふ日をへある唐土とわかれ其使
文をききわたり人海地をぬいずしや
さこのあう二千餘里のきり橋よりなれ
るよといさる水ききのいとわづしくあな
れあへるまにちみちるしゆりぬ言のこれ
貴と賤とさへ撰りふいぬぬれ

ちやうどやう

ふらうち社を月よりうららの風やまに
月よりえりんとしるるも海をよめりる里

○長崎夜話一

○十五

おこの目をかきしは又ふみりんとわいぬの
浦路よりふつてこれどおふぬのおちねい

わいぬの屋はよの道よりうけききと

ゆたうゆらうとえぬ夜ぞれき

ゆゆうとさる。腰地より付りお業とは

りあぐらふとせぬいさる令ちる人

さゆらうとせぬいさる令ちる人

うれいおまうと。ぬさくおのせきふしれ

とてばゆとさると。月風かききききき

わまりやききききききききききき

いさ遠き妻の泣く姿がえられず。きのよけりてやむひ
かぐろをやくそをねまじすれどい卯月朔日まづ
そのへり
東雲にわとい物ねと人のけえつるふ。せめて糸の
終りてもやぞんあみごながうねまひいらし
まゝおまつさかたはくいてふくもそれなり史すど
くやうもまつやむい物を棄たうれつくらなれば
又のこみす。うつすち郷よりくるものぞい我々をぐ
わるいものをもふとのがねしくて

うぐわのあはさむふりさく秋あ
ひうぐわいふ人のえはしや

とらう。あつちへはさるをりし。そこをわたり
のゆゑ。ふゆかんさんでた。戸をせいまづ
く。門はぐなく。あざなれたいす。うつく
そんやうし。そもそこらのゆゑ。うつく
えうして。ひもあなく。ゆめうさ。あま
みたら。さうくはい。うづまい。いさふつま
のらう。ちがうか。うづれ。だんだん。目
をみる。や。ずん。さう。は。う。さ。ま。ん。
あれ。このやう。およい。あ。さ。う。て。き。こ。ろ。
と。ま。く。ち。の。ま。は。の。ま。は。の。ま。は。の。ま。

とぐさねを縁　りめんをぬのきり　くへも
くかきふくたてくれり　い　まづつものうよ
てよる　〇　つ　ま　ぐやく夏のひ　ぬの　入
我身事　今　ぞ　い　呉　味　の　衣　か　う　い　日　い　て
し　さ　す　い　い　そ　に　あ　ざ　れ　け　も　何　い　ふ　わ　あ　ぢ　を
さ　は　さ　も　い　づ　や　わ　の　自　事　を　忘　や　ゆ　く　や　と
く　わ　く　く

日あそ

おんぬいふ

ぢぢぢ

くふが

は女人年々をそは唐人は極てふあて

○長崎夜話一

○廿二

日あそ　い　く　あ　か　さ　や　う　え　福　九　年　の　以　を
か　う　く　七　ナ　六　七　ナ　う　を　死　せ　い　は　極　り　は　蘭　を
ゆ　う　あ　る　の　ら　子　わ　ふ　が　あ　か　さ　い　の　ど　公　を
よ　る　止　さ　を　ぬ　い　て　の　ら　い　つ　く　成　り　え　ん　あ　い　は

長崎夜話一終

28-2-11